研究ノート

# 看護学士課程における地域看護学実習に関する文献検討

時田礼子*・岸田るみ*

**要旨**：看護師課程で必修とされている地域看護関連の実習の成果を明らかにし，看護基礎教育における地域看護学実習のあり方について示唆を得ることを目的にした。地域看護系実習を表す科目名「地域看護学実習」「早期体験実習」「公衆衛生看護学実習」等22個をキーワードとし，医学中央雑誌webを用いて文献検索を行い，該当した文献の実習内容，実習の成果や効果等を抽出し整理した。分析対象文献は６件で，学生にとっての成果や意義，教員にとっての成果や意義，住民を含む関係者への効果や意義，今後の課題が記述されていた。検討結果より，学生が住民と直接関わる機会を組み込む，実習受け入れが保健師等関係者にとっても効果や意義があることを伝え，実感できるような工夫が必要であることが示唆された。

**キーワード**：地域看護学実習，看護学士課程，文献検討

# Community Nursing Practices in Undergraduate Nursing Programs : A Literature Review

Reiko TOKITA*and Rumi KISHIDA*

**Abstract**: This study aimed to clarify the practical outcomes of community nursing practice, which is required in nursing programs, and to obtain suggestions about ideal community nursing practice in basic nursing education. Using 22 keywords, such as “community nursing practice,” “early experience practice,” and “public health nursing practice,” we conducted a literature search using the Japan Medical Abstracts Society（ICHUSHI）website, and extracted and organized the contents of practice, outcomes and effects of practice, and other information from relevant literature. Six references were analyzed, describing the results and significance for students and teachers, effects and significance for the people concerned（including residents）, and future issues. The results suggested that it is necessary to incorporate opportunities for students to directly interact with residents and to communicate and realize the benefits and significance of the practical training for public health nurses and other related personnel.

**Keywords**: community nursing practice, undergraduate nursing program, literature review

* 東京情報大学　看護学部
Faculty of Nursing, Tokyo University of Information Sciences

2022年10月16日受付
2023年１月18日受理

## Ⅰ．はじめに

地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け，看護基礎教育検討会報告書（厚生労働省，2019）の中で，看護師教育において，対象や療養の場の多様化に対応できるよう「在宅看護論」を「地域・在宅看護論」に名称変更し，内容を充実させることが明記された。さらに2021年４月より保健師助産師看護師学校養成所指定規則が一部改正され，看護師課程における地域看護学の教授の必要性が明記された（厚生労働省，2020）。国や社会の動きにとどまらず，地域看護学を教授する側である教員の認識としても，地域看護学実習について約６割が必要と回答している（安藤・小川・河原田，2018，p61）。しかし実際は，地域看護に関連する実習をどこまで含めるかは各養成所の裁量に任されている。

実際に看護師課程で地域看護学関連の実習を行っている大学の実習成果として，個人・家族・生活・地域への理解や，公衆衛生看護学への関心の高まりといった学生の成果のみならず，「満足感があった」「学生の訪問を楽しみにしている」という協力住民への効果，住民への気づきがあったという自治体保健師への効果も報告されている（村嶋，2020）（影山・緒方・篠原・村嶋，2019）（安藤・岩瀬，2018）（加藤・藤井・小松・大木，2020）。

筆者は，看護師課程における地域看護学関連の実習についての研究報告は非常に少ない現状をふまえ，先行研究において地域看護関連の実習内容を，web上シラバスの内容分析により明らかにした（時田・岸田・金子，2022）。それによると，日本看護系大学協議会の会員である290校のうち，保健師課程が全員必修である22校を除いた268校のうち，地域看護系実習を実施していた大学は45校であった。実習場所は市町村保健センターや地域包括支援センターが多く，実習内容は事業及び活動の見学や参加が多いことがわかった。一方でシラバスの分析であったため，実習成果についてはわからなかった。

そこで，実習内容の詳細について調べ，実習成果を明らかにすることで，看護基礎教育における地域看護学実習のあり方について示唆を得たいと考えた。

## Ⅱ．研究目的

国内の看護系大学において，看護学士課程で必修とされている地域看護関連の実習（以下，地域看護系実習とする）に関する研究や報告より実習成果を明らかにし，看護基礎教育における地域看護学実習のあり方について示唆を得ることを目的にした。

## Ⅲ．研究方法

### １．研究対象

地域看護系実習について実際の内容や成果や課題が記述されている文献を研究資料として用いた。また日本の看護学士課程を対象としているため，国内文献に限った。

### ２．文献収集方法

医学中央雑誌webを用いて検索した。キーワードは，筆者の先行研究において明らかとなった，看護学士課程における地域看護系実習を表す科目名「地域看護学実習」「早期体験実習」「公衆衛生看護学実習」等22個とした。キーワードは，他の言葉とは掛け合わせなかった。2017年に文部科学省が，看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学習目標を策定したことから，それ以前とそれ以降では目標が異なると考え，絞り込み条件を「2017年－2022年に発表された文献」「会議録除く」とした。検索は2022年７月に実施し，72件が該当した。

文献の選定基準は，「看護学士課程において必修とされている実習であること」「地域看護系実習及び臨地実習指導者やこれから実習をする学生を対象とした，実習に直接関連する行事であること（以下，実習に直接関連する行事）」「実習内容や成果や課題が読み取れること」「訪問看護ステーションにおける在宅看護学実習ではないこと」「実習場所が高齢者施設等のみで施設入所者に対する個人ケアを対象とした実習ではないこと」「日本国内での実習であること」とした。選定基準に沿って，データベース検索で該当した72件について，まず表題及び抄録の精読を行い，16件が選定された。続いて16件の文献について本文の精読を行い，６件を選定し分析対象文献とした。４件は地域看護系実習についての記述で，２件は実習に直接関連する行事についての記述であった。実習に直接関連する行事は，地域看護系

実習の質を高めるために行われていた。

### ３．分析方法

分析対象となった６件の文献について，研究対象実習及び実習に直接関連する行事の内容，対象者及び調査方法，実習の成果や効果を抽出した。その後，実習の成果や効果に着目し，１）学生にとっての成果や意義，２）教員にとっての成果や意義，３）住民を含む関係者への効果や意義，４）今後の課題を各文献から抜き出し，整理した。

## Ⅳ．結　　果

### １．対象文献の概要

対象文献の概要を表１に示した。以下，文献番号を［］で示す。

#### １）文献数と内訳

対象となった文献は６件であった。６件の内訳は，自大学の地域看護系学実習の実習に直接関連する行事について記述された文献が２本（窪田ほか，2018）［１］（田中・入野・窪田・長尾・野村，2017）［２］，自大学の地域看護系実習について記述された文献が４本（村嶋，2020）［３］（影山ほか，2019）［４］，（安藤・岩瀬，2018）［５］，（加藤ほか，2020）［６］であった。

#### ２）研究対象実習及び実習に直接関連する行事の内容

文献［１］３年次の地域看護学実習に先立って実施する情報交換会を扱っていた。情報交換会では，実習環境等の具体的な情報を，実習経験者である４年生から３年生へ直接伝えていた。

文献［２］は，３年次の地域看護学実習後に実施する実習報告会を扱っていた。実習報告会では，臨地指導者が実際に行った効果的な学習支援事例を共有していた。

文献［３］［４］は，同大学の同実習であり，１～４年次まで一貫して実施している予防的家庭訪問実習を扱っていた。予防的家庭訪問実習では，高齢の協力者のお宅を，１～４年次生がチームとなって年間７～９回訪問していた。

文献［５］は，公衆衛生看護学実習Ⅰを扱っていた。公衆衛生看護学実習Ⅰでは，一般家庭訪問，地区踏査，市町村実習，居宅介護支援事業所や病院における実習を行っていた。

文献［６］は，地域ケア実習を扱っていた。地域ケア実習では，地域包括支援センターもしくは障害者施設にて，利用者に対するインタビュー及び地区踏査を実施していた。

#### ３）対象者及び報告内容

対象者及び報告内容は，学生への自記式質問紙法によるアンケートの結果が２本［１］［６］，教員間による検討結果が１本［２］，文科省採択事業の振り返りが１本［３］，実習の概要等についての報告が１本［４］，学生の実習記録及び実習に関わる住民を含む関係者へのインタビューやアンケート結果が１本［５］であった。

表１．対象文献の概要

| 文献番号 | 出典 | 研究対象実習及び実習に直接関連する行事の内容 | 対象者及び調査方法 | 実習の成果や効果 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 窪田ら（2018） | 地域看護学実習を，３年次後期に実施。<br>実習に先立って，情報交換会を実施。実習環境や宿泊施設での生活のための準備物等具体的な情報を，実習経験者である４年生から３年生へ直接伝える。 | 情報交換会に参加した４年生46名。自記式質問紙法にて，情報交換会に対する感想や意見を聴取し，これまでの取り組みと今後の展望について検討。 | 〈３年生にとっての意義〉<br>・実習に向けての準備の必要性や実習地で体験可能なことを具体的に把握し，実習地選択に役立つ。<br>・実習を具体的にイメージしてレディネスを高め，講義・演習にも前向きに取り組むきっかけとなる。<br>・身近であり，先に実習を経験している先輩からのアドバイスは，大いに効果的である。<br>〈４年生にとっての意義〉<br>・経験を後輩に伝承できることに価値を見出す。<br>・他の実習先へ行ったグループとの情報共有が可能。<br>・地域看護についての視野が広がる。<br>・自分の実習を振り返る機会となる。<br>〈教員にとっての意義〉<br>・県内全域の多様な実習地に関する情報を得られる。<br>・学生が実習に求めることや支援を必要とする可能性への気づき，学生をサポートするためのヒントを得られる。<br>〈今後の課題〉<br>・会の運営や配布資料について改善の余地がある。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 2 | 田中ら（2017） | 地域看護学実習を，３年次後期に実施。<br>実習後，実習報告会を実施。臨地指導者が実際に行った効果的な学習支援事例の共有。 | 教員間による実習報告会の影響を検討。 | 〈参加者への効果〉<br>・互いの工夫を共有し，学習支援として意味づける。<br>・組織全体で実習生を受け入れ学習支援する視点への広がり。<br>・実習生の学習支援が組織に新たな育ち合いを生み出すことを共有。<br>・保健所保健師にとって，管内保健師の人材育成ニーズに対応する役割の重要性を確認する機会となる。<br>・事例発表した指導者にとって，自らの実習指導経験を効果的な学習支援として意味づける機会となる。<br>〈教員への効果〉<br>・実習フィールドの地域特性や職場環境に合った実習指導の工夫を把握する機会になる。<br>・指導者の印象に残る説明のヒントが得られる。<br>〈今後の課題〉<br>・指導者個人だけでなく，組織への効果を検証する方法の検討。 |
| 3 | 村嶋（2020） | 予防的家庭訪問実習を，１～４年次まで一貫して実施。高齢の協力者のお宅を１～４年次生がチームとなって年間７～９回訪問。 | 文科省の「地（知）の拠点整備事業（COC）」に採択された「看護学生による予防的家庭訪問実習を通した地域のまちづくり事業」の振り返り。 | ・学生たちは「病院実習でも，患者さんの入院前後の生活をイメージできるようになった。」「上級生と協力者さんとのやり取りを見て，観察のポイントやコミュニケーションのとり方を学ぶことが出来た。」と述べている。<br>・協力者の感想から，高齢者にとっても，若い学生の訪問が生活の張りになっていることが分かった。<br>・協力者の感想から，地域に活気を与える効果のあることが分かった。 |
| 4 | 影山ら（2019） | | 実習の概要と背景，現状と意義などについて報告。 | 〈学生の成果〉<br>学生は，主に以下のことを学んでいた。<br>①ウェルネスと予防の観点，②地域生活に関する理解と地域特性，③チームワークの重要性。<br>〈協力者への効果〉<br>・「学生の訪問を楽しみにしている」「生活に張りが出る」などと語っている。<br>・学生との経験を新聞に投稿，実習オリエンテーション等にて学生を励ます，COCのシンポジウムで報告してくれる協力者も出現。<br>・実習協力者群と対象群を比較し，協力者群では対照群よりも健康への関心が高まっていた。<br>・協力者の‘地域への声’，学生から見て気になった地区の情報，認知機能に不安がある協力者の情報などは，市保健師や地域包括支援センターと共有して対応を図った。 |
| 5 | 安藤ら（2018） | 公衆衛生看護学実習Ⅰを，３年次前期に実施。一般家庭訪問，地区踏査，市町村実習，居宅介護支援事業所や病院における実習。 | 実習プロセスの記述，実習Ⅰを履修した３年生の実習記録，実習協力住民へのアンケート結果，A市の保健師へのインタビュー，実習施設へのアンケート結果より，実習プログラムの成果と課題を明らかにし，看護師養成のための学士教育課程における地域看護実習プログラムの改善に資する。 | 〈学生の成果〉<br>・訪問実習では，個人と家族の生活と地域の特性を関連させて査定し，多角的にアセスメントすることができた。<br>・地区踏査による地域の自然環境・社会環境と健康課題を考える訪問実習は，患者の生活背景の理解を深め，個人への支援能力の向上に貢献する。<br>・地元団体からの話は，目に見えにくい地域の文化や風土への理解を深めることにつながった。<br>〈協力住民への効果〉<br>・「地域や健康を振り返る機会になった」ことや「学生との対話が楽しかった」という満足感があった。<br>〈自治体保健師への効果〉<br>・「住民の新たな側面に対する気づき」や「自分が健康な人の生活が見えていないことへの気づき」などを得ていた。<br>〈今後の課題〉<br>・住民から継続した関わりを求める声もあり，このような要望に応えることは，実習で得られた地域住民との関係をさらに強固なものにし，継続した実習フィールドの確保につながると思われるため，方法を考える必要がある。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 6 | 加藤ら（2020） | 地域ケア実習を，２年次に実施。地域包括支援センターもしくは障害者施設にて，利用者に対するインタビュー及び地区踏査を実施。 | 実習履修学生84名。自記式質問紙法にて，学習目標の習得状況，公衆衛生看護学に関する関心の状況，体験項目，自由記述を聴取。 | ・実習前後における学習目標の習得状況は，28項目全てで実習前後で有意に点数が上昇した。<br>・公衆衛生看護学への関心は，関心がある群が実習前で39名（59.0%）であったが，実習後61名（92.4%）と大きく上昇していた。<br>・最も学んだことの記述内容を分析すると，「生活者としての対象の理解」「生活に着目した支援」「支援方法」「実習施設の理解」「連携」「ノーマライゼーション」「医療知識を持つ」の７カテゴリに分類できた。<br>・今後の課題として，実習施設による学習成果の違い，実習時期と他科目との連動の必要性を検討する必要がある。 |

## ２．分析結果

文献に記述された実習の成果や効果に着目し，１）学生にとっての成果や意義，２）教員にとっての成果や意義，３）住民を含む関係者への効果や意義，４）今後の課題は，以下の通りであった。

### １）学生にとっての成果や意義

学生にとっての成果や意義が記述されていた文献は，文献［１］［３］［４］［５］［６］であった。

文献［１］では，情報交換会の３年生にとっての意義は，先輩からのアドバイスは教員からの一方向的な説明と比較して大いに効果的であり，実習を具体的にイメージでき，実習に向けての講義・演習にも前向きに取り組むきっかけとなっていた。また４年生にとっての意義は，実習を振り返る機会となり，経験を後輩に伝承できることに価値を見出し，地域看護についての視野が広がっていたと報告されている。

文献［３］［４］では，①ウェルネスと予防の観点，②地域生活に関する理解と地域特性，③チームワークの重要性を学んだと報告している。

文献［５］では，訪問実習により個人と家族の生活と地域の特性を関連させて査定し，地区踏査により患者の生活背景の理解を深めていた。また協力住民からの話により，目に見えにくい地域の文化や風土への理解を深めていたと報告されている。

文献［６］では，実習前後で学習目標の習得状況が有意に上昇し，公衆衛生看護学への関心も大きく上昇していた。また最も学んだことの記述内容を分析すると「生活者としての対象の理解」「生活に着目した支援」など７カテゴリに分類できたと報告されている。

### ２）教員にとっての成果や意義

教員にとっての成果や意義が記述されていた文献は，文献［１］［２］であった。

文献［１］では，県内全域の多様な実習地に関する情報を得られ，学生が実習に求めることや学生をサポートするためのヒントを得られたと報告されている。

文献［２］では，実習フィールドの地域特性や職場環境に合った実習指導の工夫を把握する機会となり，さらに指導者の印象に残る説明のヒントが得られたと報告されている。

### ３）住民を含む関係者への効果や意義

住民を含む関係者への効果や意義が記述されていた文献は，文献［２］［３］［４］［５］であった。

文献［２］では，実習報告会に参加した指導者は，互いの工夫を共有し，学習支援として意味づけ，組織全体で実習生へ学習支援する視点へ広がり，さらに学習支援が組織に新たな育ち合いを生み出すことを共有できた。また保健所保健師は，管内保健師の人材育成ニーズの重要性を確認する機会となったと報告されている。

文献［３］［４］では，協力者の生活に張りが出たり，シンポジウムで報告してくれる協力者も出現したりしていた。さらに協力者を対象とした研究において，協力者群は対象群よりも健康への関心が高まっていた。また協力者の声，学生が気になった地区の情報，認知機能に不安がある協力者の情報などは，市保健師や地域包括支援センターと共有して対応を図ったと報告されている。

文献［５］では，協力住民は，地域や健康を振り返る機会になるなど満足感があった。自治体保健師は，住民の新たな側面に対する気づきなどが得られたと報告されている。

### ４）今後の課題

今後の課題が記述されていた文献は，文献［１］［２］［５］［６］であった。

文献［１］では，会の運営や配布資料について改善

の余地があると報告されている。

文献［2］では，指導者個人だけでなく，組織への効果を検証する方法の検討が課題であると報告されている。

文献［5］では，住民から継続した関わりを求める声もあり，このような要望に応える方法を考える必要があると報告されている。

文献［6］では，実習施設による学習成果の違い，実習時期と他科目との連動の必要性を検討する必要があると報告されている。

## Ⅴ．考　　察

### 1．地域看護系実習及び実習に直接関連する行事の成果や意義の特徴

地域看護系実習及び実習に直接関連する行事の成果や意義は，学生，教員，住民を含む関係者それぞれについて述べられていた。

学生にとっての成果や意義として，実習や実習に直接関連する行事を通して，学生の地域看護についての視野の広がりや公衆衛生看護学への関心の高まりが認められた。具体的には，地域特性の理解，個人や家族と地域特性との関連，生活者としての対象理解，予防の観点であった。これらは，文部科学省（2017）が提示している「看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標」における看護の対象理解に必要な基本的知識のうち，「Ｃ生活者としての人間理解」の達成につながると考えられる。Ｃ生活者としての人間理解のうち，特にＣ－２－３）生活環境としての場，Ｃ－２－４）地域社会における生活者の学修目標と，今回の文献検討で得られた学生にとっての成果や意義が合致しており，地域看護系実習及び実習に直接関連する行事に有用性があると考えられた。

住民への効果や意義として，実習を通して学生と関わりを持った住民は，自身の居住する地域や自身の生活についての振り返りの機会となり，満足感を得るだけでなく，結果として健康への関心が高まったり，生活の場が広がったりしていた。さらに学生が実習を通して気づいた住民個人や地域の課題を市保健師や地域包括支援センターと共有することで，住民への支援につながっていた。

教員にとっての成果や意義として，学生の要望や実習フィールドの特性等を知る機会となり，さらなる実習及び実習に直接関連する行事の改善を行うことができると考えられた。

渡邉・篠原（2019，p91）による住民ニーズに基づき看護学部の役割を検討した研究において，住民の健康が維持・増進される生活を目指して看護学部が住民の健康づくり支援を行うことが役割であると延べている。地域看護系実習を通して，このような住民ニーズも満たされ，学生の看護実践能力も修得され，これらが看護学部による地域貢献につながると考えられた。

### 2．地域看護系実習及び実習に直接関連する行事の今後の課題

住民からの継続した関わりといった要望に応える方法の検討，指導者個人から組織への効果の広がりが挙げられた。前項で，地域看護系実習が看護学部による地域貢献につながると述べたが，それをさらなる強固なものにするために，住民を含めた関係者とのつながりを維持することが重要であると考える。高林らは（2019，p15），４年生の総合実習で，住民との協働による実習を実施し，専門職が本実習をどのように認識したかを明らかにした研究において，住民のエンパワメントを支援していたことが考えられた一方で，実習の回数を重ねないと健康問題の解決は難しいと認識していたと述べている。こちらは総合実習なので，全員必修の地域看護系実習とは一概には比べられないが，今回の文献検討においても継続的な関わりは住民からも求められており，実習のみならず，実習外でも地域とのつながりを継続する必要性は高く，大学として方法を検討していく必要があると考えられた。

### 3．看護学士課程における地域看護系実習への示唆

いずれの実習も，家庭訪問やインタビューといった直接住民と関わる機会を持っていた。学生にとっての成果を見ると，住民との直接の関わりから，個人と家族の理解，生活の理解，地域特性の理解をしていた。筆者の先行研究において（2022，p72），実習内容の内訳を見ると，事業及び活動の見学や参加が大半であり，学生が住民と直接関わる機会がないものも多かった。本文献検討の結果である学生への成果をふまえ，学生が住民と直接関わる機会を組み込むことも，より充実した実習に向けて必要な要素の一つであると考える。合わせて，住民にとっても

効果や意義があることもわかった。野村は（2018, p10-12），実習は単なる体験にとどまらず，反省的考察を繰り返すことによって，経験として意味づけながら学習を深化させるのが実習授業の最大の特徴であり，意味づけ，概念化して，経験知とする必要があると述べている。よって，理解にとどまらず，経験を意味づけ，学生の経験知となるまでを実習目標として，実習内容を組み立てていく必要があると考えられる。

保健師等関係者についても，実習を通しての効果や意義が得られていた。実習報告会を通してではあったが，実習が人材育成の一端を担う可能性も示唆された。麓らは（2017，p51），公衆衛生看護学実習を受け入れた自治体が，新任期・中堅期保健師のエンパワーにつながったことを報告しており，それに対して野村は（2018，p17），実習を活用し，人材育成につながる現任教育の展開が看護の実践現場から示唆されたことは，実習授業を依頼する側にとって大きな励みとなると述べている。よって，実習受け入れが保健師等関係者にとっても効果や意義があることを，実習の受け入れ交渉や打合せ時に伝え，実際の実習を通しても効果や意義を実感できるような工夫が必要であると考えられる。

## Ⅵ．本研究の限界と今後の課題

本研究は，文献数が少なかった。2021年４月から保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正が施行され，2022年度の入学生から新カリキュラムが適用されることになった。地域看護の授業や実習に関連する報告や研究は，これからさらに増えてくることが予想される。よって今回の文献検討にとどまらず，引き続き検討を続けていく必要がある。また，筆者自身も自大学の地域看護学実習を振り返り，報告や研究を行っていく必要性を実感した。各養成所で実施されている地域看護系実習について，実態調査や当該校へのインタビュー等により，さらなる報告や研究の積み重ねが必要である。

### 引用文献


安藤智子，岩瀬靖子（2018）．看護師養成のための学士教育課程における地域看護実習プログラムの評価．千葉科学大学紀要，11，127-141.

安藤陽子，小川克子，河原田まり子（2018）．看護師課程における地域看護学の必要性に関する看護教員の認識と属性との関連．日本地域看護学会誌，21(2)，58-64.

麓由香里，福見早苗，眞鍋ゆかり，吉村梨江，和田　彩，大野敬子，住田江里子，得野美由紀，武田妙子，佐伯直子，篠原万喜枝，松下久美子，入野了士，野村美千江（2017）．公衆衛生看護学実習を切り口とした砥部町における地区活動の再評価．四国公衆衛生学会雑誌，62(1)，51.

影山隆之，緒方文子，篠原　彩，村嶋幸代（2019）．看護学生による高齢者への予防的家庭訪問実習．保健師ジャーナル，75(3)，238-244.

加藤昌代，藤井広美，小松実弥，大木幸子（2020）．看護師基礎教育課程における地域ケア実習の教育評価．保健師教育，４(1)，68-76.

厚生労働省（2019）．看護基礎教育検討会報告書．https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html（参照2022年10月15日）.

厚生労働省（2020）．保健師助産師看護師学校養成所指定規則．https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=80081000&dataType=0（参照2022年10月15日）.

窪田志穂，田中美延里，奥田美惠，入野了士，長尾奈美，野村美千江（2018）．上級生との交流形式で行う，地域看護学実習に向けた実習地情報交換会の取り組み．愛媛県立医療技術大学紀要，15(1)，47-52.

文部科学省（2017）．看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm（参照2022年10月15日）.

村嶋幸代（2020）．社会に新風を吹き込む看護のリーダーシップ―大分県立看護科学大学の活動から．看護科学研究，18，49-56.

野村美千江（2018）．実習指導の原理―公衆衛生看護学実習が授業として成立するために．保健師教育，２(1)，10-18.

高林知佳子，平澤則子，飯吉令枝，井上智代，野口裕子，久保野裕子（2019）．専門職における住民との協働によるパートナーシップ型地域診断実習の認識．新潟県立看護大学紀要，８，9-16.

田中美延里，入野了士，窪田志穂，長尾奈美，野村美千江（2017）．効果的な学習支援事例の共有による実習指導者と教員の協働リフレクション―地域看護学実習報告会における試み―．愛媛県立医療技術大学紀要，14(1)，27-34.

時田礼子，岸田るみ，金子仁子（2022）．看護学士課程における地域看護学実習の実態調査―web上に公開されているシラバスの内容分析―．東京情報大学研究

論集，25(2)，69-78.
渡邉美樹，篠原亮次（2019）．地域貢献を目指した看護学部の役割～健康促進と看護学部の地域貢献活動に対する住民ニーズに基づく検討～．健康科学大学紀要，15，85-92.